

審査の結果の要旨

氏名 田中 有紀

本論文は、十二平均律理論を発明した、明代後期の朱載堉（1536-1611）を中心に、中国音楽理論の発展を思想史的に分析したものである。三部からなり、その特徴は「経学としての楽」の歴史として中国の音楽思想全体を捉えなおすところにある。

第一部は、朱載堉の理論を理解するための予備的考察である。「経学としての楽」すなわち儒学の楽論の特質を、差異化と調和、「自然」と「人為」、今楽と古楽というテーマから論じた（第一章、第三章、第四章）。また朱載堉が批判の対象とした漢の三分損益法および朱子学の楽律論を概括した（第二章、第五章、第六章）。

第二部では、最初に朱載堉の経歴を略述し（第七章）、朱載堉が引用する明代の楽論と何瑋の理論について論じた（第八章、第九章）。第二部の後半は、朱載堉の音楽理論の分析である。朱載堉の黄鐘論を分析し（第十章）、その律曆思想をとりあげ、律・曆・度量衡が象数易学理論によって同貫される世界観を分析した（第十一章）。また朱載堉の舞蹈論と数学論からは、彼が今楽を強く信頼し、古楽復興の重要な鍵としたことを明らかにした（第十二章、第十三章）。以上を総じて、朱載堉の音楽理論は、先秦以来の、差異化と調和を重んじる礼楽思想にのっとり、『漢書』律曆志の律曆合一の枠組を、宋学の象数易学理論によって構築し直したものであると結論した。

第三部は、朱載堉以降の平均律の展開である。「経学としての楽」において楽律学が隆盛した清朝初期から中期を論じ、官製楽律書と江永の楽律理論書を取りあげた（第十四章）。清朝後期を「経学としての楽」の転換期として位置づけ、今楽研究が力を持ち、平均律を含む数理的楽律研究が象数易学とともに放棄され、「経学としての楽」が楽律学から音楽学へと開かれていく様相を描いた（第十五章）。

終章では、本論文が描いた「経学としての楽」の歴史の流れを示すと同時に、清末以降の音楽史の展開についても概要を述べた。

本論文で第一に評価すべきは、中国音楽をテーマとして思想史の研究を成し遂げた点である。日本の近代的な中国音楽史研究は田辺尚雄に始まり、岸辺成雄がそれを大きく発展させたが、田辺の研究は音楽音響学、岸辺のそれは比較音楽学であり、いずれも思想史ではない。日本最初の本格的な中国音楽思想史として新たな一步を踏み出したといえるであろう。第二に評価すべきは、朱載堉の音楽理論を複数の側面から徹底的に分析したことである。中国音楽史ひいては中国礼楽史上のアポリアに解答を呈示し、儒学思想研究者に新しいビスタと視点を提供している。

本論文には中国音楽の本質それ自体の解明など、今後に残された課題もあるが、従来の中国音楽史研究のレベルを大きく超えてきている。論者には東アジア音楽史の全面的な解明を期待したい。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。